

# 命を殺したいですか、生かしたいですか？

3月11日、東日本大震災に伴い発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故により、同発電所から半径20キロ圏内が警戒区域に設定され、家畜の他、様々な飼育動物が取り残されました。生きる為に不可欠な水と餌やりを政府は一切認めなかったため、多くが悲惨な状態で餓死しました。何とか生き残った命も、全頭殺処分の危機に瀕しています。

4月22日立ち入りが一切できなくなり、飼育の性質上、畜舎内に留めざるを得なかった乳牛農家は「餓死よりは安楽死」を希望しました。24日、農家数名の声を聞き、福島県は「瀕死の家畜の」安楽死処分を決めました。5月12日、国は同意のある「全頭」安楽死処分の指示を県に出しました。乳牛農家たちを中心に、圏内3385頭いた牛たちのうち、49頭が同意され、6月に安楽殺が行われました。

餌やりができないどうしようもない状況下で、安楽死に同意しないと損害賠償金が支払われないという誤解も手伝い、6月までに全体の三分の一の農家さんたちが同意しました。農水省が安楽死を求めた際に確約していたはずのブルーシートかけと石灰撒きが徹底されずに遺骸が庭先に放置されていたこともあり、安楽死の同意の増加は一時ストップしました。

一方、和牛農家たちは牛が放たれ草を食んで元気に生きている場合が多く、通常より大分高い損害賠償金が補償されたとしても、子牛を含めた元気な牛たちをわざわざ殺すことに同意する人は限られていました。

しかし7月8日に一時帰宅が始まると、家畜が水や塩を求めて、近隣に侵入した『被害』が明らかとなりました。自分の畜舎に水や塩、餌を置きに行くことも、柵を設置して囲い込むことも禁止されていたのに、被害の全責任がまるで農家にあるかのように責められ続けました。ご近所迷惑を考えて、断腸の思いで安楽死同意する農家が再び増えはじめました。

「殺したい農家なんていない。…でも、行政と逆のことは、被災した身では生きづらいんだ。」

殺すことを迫られ追い詰められてゆく中、11月13日、それでも生かすことを諦めない農家たちが集結し、「警戒区域の家畜を守る会」を立ち上げました。人への被害を無くしつつ牛の世話と管理を自分たちでやって何とか生かせるよう奮闘しています。メンバーは一人、また一人と増えてきました。生かすことに賛同する市町村・県・国の超党派の議員達も一人、また一人と増えてきました。支援者を全国に、これからもっと広げていきたいと思っています。

殺すことしかできないのは、先進国としてあるまじき、チェルノブイリ以下の対応だと国内外からの批判も高まり、7月8日に菅総理は、生かすための牧場構想を「動物愛護と学術研究の観点から重要な提案だ」と発言しましたが、12月になっても原則殺処分の指示を撤回するまでには至っていません。冬季に入り草も無くなり、生かすか殺すかの瀬戸際に来ています。そこで、是非、生かすこと自体が悪いのかのように思わせる非人道的な政策を、皆さまの声で変えて下さい！

もうお金にならないからといって殺してOKなんて思う農家はいません。命をいただいて生活をしていると謙虚に思い愛情をかけて育てています。農家の心を守るため、また私たち皆の人間性を守るため、動物福祉の観点からも、家畜たちを保護・管理・飼育する選択肢を認めてもらうことを国に強く求めます。皆さま、諦める前に、後一度だけ声をあげて下さい。

## 私たちは、家畜を、「生かす」ことを求めます。

お名前	ご住所	農家の方は○を

※ご記入いただいた個人情報、この要請目的以外には使用しないことを誓います。

取扱団体:警戒区域の家畜を守る会 サポート団体:希望の牧場プロジェクト、家畜おたすけ隊、他

ご郵送先:〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-22-7 道玄坂ピア 4F 電話番号:03-6277-5090(針谷)